

第6回体の動きを高める運動領域部会記録

参加者 河野 古川 岡田 畠中 関川 山本 藤原 小木曾 土屋 小池 大川
常任理事 高草木校長 黒澤校長 佐々木校長

1 今回の部会での検討内容

- (1) 昨年度の研究内容の確認 P. 1
- (2) 指導案検討 P. 1 ~ P. 4
- (3) 常任理事の先生より P. 4

今回話し合われる中で見えてきた第1時学習活動案

- ①体の動きを高める動きの目的
- ②4要素
- ③藤井動画（子供が様々な運動に取り組む動画）
- ④やってみようという意欲を高め、4つの運動に取り組む
- ⑤教師は発問をしていく
「何をしているの?」、「これやって何が高まるの?」、「高まりって何だろうね」、「何でそれやっているの?」、「何が高まるか考えながらやってみな?」、「そもそも高まりって何?」
- ⑥やってみようだった?（学習カード）
- ⑦全体で共有

2 昨年度の研究内容の確認

- (1) 昨年度の研究を受け、今年度の研究で行うこと
令和3年度の体の動きを高める運動領域部会研究課題
 - ①学習課題を見出し、解決していくための教師の働き掛け
 - ②個別最適な学びと協働的な学びをつなげる手だて
 - ③2学年を見通した学習過程

(2) 昨年度の研究を受けての質問

小池 学びのロードマップとは?ルーブリックのことか?

河野 見出した問いから、課題を見出す姿を積み重ねていくとゴールに到達する過程を可視化したものが学びのロードマップである。

現状とゴールを設定して、毎時間ゴールに迫っていくことをねらいとしている。

ロードマップを可視化することで、個の学びが学級全体へ共有されていく。

ロードマップは各地区の研究かいでも広がってきている。

畠中 水泳のロードマップを紹介。

現状を把握する→ゴールを設定する→どのように迫るのか考えていく

参考になっているのが、ゴールキャスティングである。

「ゴールに向かって課題解決に取り組む過程」と「現状から今後の課題解決のプロセスを考えていく過程」の2つがあると考える。

3 指導案検討

(1) 共通課題を設定するべきか?

藤原 課題は解決していくものだから、捉えとしては設定してよい。

単元を通しての方向性は設定するとよいのではないのか?

一人一人が課題をもつことが大切であるが、共通課題を設定する時間も単元の中にあるのではないのか?

山本 共通課題があると安心感につながるのではないのか?

畠中 ロードマップを作成するまで（単元の序盤）は、必要なのではないのか?

第1時、第2時では必要なのではないかと考える。

岡田 5年生では、体の動きを高める運動のマネジメントが大切だと考える。
子供が目的意識をもてるようになるまでは、教師が学びの流れを作っていくことも大切なのではないかと考える。
2年間を通して、20時間と考えると、5年生の最初の2時間は、教師が学びの流れを作っていくことも大切だと考える。

河野 前半の2時間の課題は教師が与えるものとして捉えてよいのか？

岡田 教師が提示するものだと考えている。

畠中 河野さんと岡田さんは同じことを言っていると思いますが・・・
岡田さんは、子供が課題を見出すと捉えていたのに、教師が与えると捉えているように聞こえる。

(2) 岡田実践(第1時について)

古川 5年生の第1時で共通課題がない場合に、どのように授業を始めますか？

河野 教師は、「体の動きを高める運動をやるよ」ということを伝え、「体力の4要素」を伝える。
子供は「運動をやってみる」。
教師は運動している子供に、発問しながら「こうしていけばいいかな?」「どうすればいいかな?」というような問いを見出す時間にする。

岡田 4要素は私も提示することは大切だと考える。

畠中 子供が運動しているときの言葉掛けが難しい。巧みな動きに限定して、巧みの動き高まったか?というような展開はやりやすい?

河野 「何やってるの?」って聞いていくと「何高めているの?」と聞きたくなる。
目的はある程度示して、「何やっているの?」「何を高めているの?」「何でそういうふう思ったの?」というような具体的な発問も必要だと考える。

岡田 第1時は、巧みの動き限定にして取り組もうとしている。

古川 昨年度の部内授業から、共通のめあてはなくてもよいと考える。

河野 抽象的なめあての提示は必要なのかどうか?

岡田 一般化という側面と授業研究としての側面の両面があると考え。今年度は、授業研究の側面を中心として取り組むのはどうかと考えている。

河野 おしろ、一般化を図るのであれば、「共通のめあては設定しなくても大丈夫なんですよ。」という提案がしたい。共通のゴールイメージを設置することで、毎時間のめあてはなくても、一人一人が課題を見出して取り組んでいくということを伝えていくこともできるのではないかな。

河野 第2時でロードマップを作成し、第3時から課題を解決していく流れがよいと考える。

畠中 単元の序盤に仮でゴールを立て、学習の中盤でゴールを設定し直してもよいと考える。

岡田 一番は、「体の動きを高めよう」というという大きな目的だが、「○○の動きを高めよう」や「○○をしたい」というケタの大きさの異なる目的を設定する可能性もあると考える。
第1時で藤井さんの動画(子供が様々な運動に取り組む動画)、第2時で藤原さんの動画(生涯スポーツにつながるイメージをもたせる動画)を活用しようと考えている。

畠中 藤井さんの動画(子供が様々な運動に取り組む動画)を見て、子供たちの目はキラキラしていた。「問いを見出すよりも、運動への意欲の高まりが見られた。」

河野 昨年度の畠中実践の1時間目は、問いと意欲の高まりをねらう1時間だった。

畠中 目的は示さなかったの、目的に対する問いは出にくかった。

河野 今年度は、目的を示し、言葉掛けも「目的を問う具体的な発問」にしていくことで目的意識を見出す児童が増えるのではないかな?

古川 動画を見せて、意欲が高まるのは分かっているので、目的に対する問いを高める働き掛けがで

きるとよいのではないか？

岡田 巧みな動きを高めることをねらいとしているので、
「何やっているの？」「何が高まった？」「何でそれをやっているの？」
「何が高まるか考えながらやってみな？」「これをやって何が高まるの？」
「そもそも高まりって何？」などの発問が考えられる。

古川 最後の振り返りのところで、最後は短冊に書かせるのか？

岡田 昨年度の畠中実践では、短冊を使っていた。(普段から使っていて慣れていたので短冊を使用)
今年度の岡田実践では、「もくもくカード」を準備していく。

古川 「やってみてどうだった」と聞いた後は？

河野 子供は、「〇〇が楽しかった。」と答える子もいる。問いをもった子に対しては、「なぜ問いをもったの？」と聞くことも必要だと考える。子供と教師のやり取りをする時間が必要だと考える。
学習カードを書いて、子供の学習カードから整理して次の授業のはじめに紹介するのはどうか？

岡田 「もくもくカード」には、子供から聞いて教師が書いていきたい。

岡田 第1時で扱う運動は、「長なわ」、「短なわ」、「フープ」、「ボール」でよいか？

河野 それ以外に用具は用意するか？

岡田 平均台を入れるかどうか迷っている。体育館に置いてはおくが、使うか使わないかは子供の発想に任せようとする。

河野 運動の行い方をコースで示すものがあったとしてもよいのではないか？

山本 平均台の動きはなぜ入れなかったのか？

岡田 なくなったわけではなく、第1時では入れなかっただけである。

河野 運動例集がほしい。

山本 夏休みに作りますか。

岡田 「長なわ」、「フープ」、「短なわ」、「ボール」、「平均台」の5つの場で考えていく方向で考えていく。

藤原 ボールの運動をしている子供のイメージはあるか？

岡田 ドリブルをするイメージであった。

畠中 もとの動きの指導は必要だと考える。

藤原 ケンステップを置いて、そのケンステップの輪の中をドリブルしていく運動の行い方もある。

河野 分かりやすい運動例の方がいいと考える。子供がボール投げ合っていて、「力の調整力を高めています。」と言われたときに教師は困ってしまう。

いい運動例として、「工夫の余地があり」、「楽しい運動」を考えていきたい。

古川 これまでの話をまとめると本時の流れは以下の通りである。

①体の動きを高める動きの目的

②4要素

③藤井動画(子供が様々な運動に取り組む動画)

④やってみたいという意欲を高め、4つの運動に取り組む

⑤教師は発問をしていく

「何をしているの？」、「これをやって何が高まるの？」、「高まりって何だろうね」、

「何でそれをやっているの？」、「何が高まるか考えながらやってみな？」、

「そもそも高まりって何？」

⑥やってみてどうだった？(学習カード)

⑦全体で共有

河野 目的の確認の際には、3年前作成したリーフレットを活用して、その後に動画を見て、運動をやってみる活動の流れにしたい。

畠中 タブレットは誰がとるか？

河野 部員が撮る。岡田さんは、言葉掛けに集中した方がよい。

(3) 2学年を通した学習過程について

古川 学習計画に、巧みな動き、持続、力強さ、柔らかさの枠組みを最初に決めておく必要があるか？

小木曾 運動のしばりは必要なのではないかと考える。運動をしぼることで、子供たちは、高めることへの目的意識がもちやすくなると考える。

土屋 授業のイメージをすると、枠組みを決めずに授業をすると指導はしにくく感じてしまう。

畠中 今年度は、枠組みがなくても授業ができるという提案をしていきたいと考える。

河野 子供がバラバラなことをしていても体の動きを高めていく目的をもって取り組む授業を考えていきたいと考えている。

岡田実践も枠をなくしてもよいのではないかと考える。

小池 これまでは、「何を高めるために、この運動やっているの？」という発問をしていく捉えであったが、「何をしているの？」「何を高めているの？」「どうやったら高まりそう？」と発問していくのはなぜか？

河野 子供は学習のはじめから、「〇〇を高めるために、～の運動をする」という目的意識をもって取り組める子はクラスの2～3割程度だと考える。多くの子は、「おもしろいからやっている」という目的意識から始まると考え、一人一人の思いを大切にしながら、体の動きを高める目的意識を見出せるようにしていきたいと考えている。

4 常任理事の先生より

(1) 高草木校長

一般化は部員以外の皆さんが求めることだと思うが、今回の部内授業としての実証授業については、授業研究を進め、次の実践に向けて分析して、授業をつくり、提案していけばいいのではないかと考える。

今、どの研究会も人集めに困っている。研究ができる環境があることは幸せである。

(2) 黒澤校長

授業イメージができてきた。

第1時は「目的を確認する」→「体の動きとは」→「動画で確認し、やってみる」

第2時は、ゴールのイメージに向けて、「どうなりたい」「どうやっていくか」を考えるきっかけを作っていく時間なのだと考える。

児童がタブレットを活用する際には、何のために撮るのかを明確にして、使用する必要がある。

(3) 佐々木校長

今後は、「授業をやってみて」、「授業の課題を見付け」、「夏に話し合い」、「夏季合研につなげる」。